

International Student Center News



金沢大学

留学生センターニュース



*vol. 11
October 2007*



こうしゅうかい
スキー講習会



TOEFL-iBT セミナー 2007



からてどう
空手道クラス



ジャパントント 2007
さつ ま び わ こ と よこぶえたいけん
「薩摩琵琶・琴・横笛体験」



外国人留学生のその後

きたうら まさる りゅうがくせい ちよう
北浦 勝 (留学生センター長)

かなざわだいがく そつぎょう しゅうりょう あと もと がいこくじんりゅうがくせい にほんご に
金沢大学を卒業や修了した後、元の外国人留学生はどうしているのでしょうか。日本語・日
ほんぶん か けんしゅう たん きりゅうがく がくせい ほ こく だいがく もど げんそく
本文化研修プログラムや短期留学プログラムの学生は母国の大学へ戻ることが原則ですが、そ
れ以外の彼らは、その後どのような人生を歩んでいるのでしょうか。金沢大学で勉強したこと
がプラスになり、初めに抱いていた目標に大きく近づいたのでしょうか。帰国して以来何の音沙
た ひと おお たよ
汰もない人が多いのですが、「便りのないのはよい便り」ですから、あまり気にしないように
しています。わたしがたまたま行く末を知っている、わたしのけんきゅうしつ そつぎょう しゅうりょう もとりゅうがく
せいの ほ こく もど ひと がいこく い ひと にほんこくない ひと
生には母国へ戻った人と、外国へ行った人、日本国内にいる人がいます。

ほ こく もど もとりゅうがくせい さいわい しんせつ だいがく じょしゅ さいよう きょういく けんきゅう いそが
母国へ戻った元留学生は幸いにも新設の大学に助手として採用され、教育や研究などで忙し
まいにち おく ほ こく にほんじん ひる よる はたら ひと
い毎日を送っています。「母国では、日本人のように昼も夜も働く人はいない」と言っていた
かれ しんせつこう しんまい きょうし がくせい し どう こころ ま ひる
彼ですが、「新設校の、しかも新米の教師であり、学生は指導を心待ちにしているから、昼も
よる はたら つた き がんば とお こころ なか はげ
夜も働くしかない」と伝え聞いて、「頑張れよ」と遠くから心の中で励ましています。

がいこく い ひと なか ほんにん けっこんあいて ほ こく だい くに はたら ひと
外国へ行った人の中には本人はもとより、結婚相手の母国でもない第三の国で働いている人
がいます。アメリカ西海岸へ渡った人はある建設コンサルタント会社で働いていました。その
ねん ご けんきゅうしつ で ひと くに かいしゃ けい ゆ はたら
6年後にわたしの研究室を出た人もあちこちの国や会社を経由して、アメリカで働いています。
このふたり たが めんしき
この二人は互いに面識がありません。しかし、あるときアメリカ建設業協会主催の研修会が西
かいがん ふたり ちゅうしよく あいせき せ けんぱし じ こしうかい なん
海岸であり、この二人が昼食でたまたま相席となり、世間話をし、自己紹介をしたところ、何
ふたり けんきゅうしつしゅうしんしゃ はなし き せ かい せま
と二人ともわたしの研究室出身者とわかったというのです。この話を聞き、世界は狭いことを
じっかん おも
実感し、なぜかうれしく思いました。

げんざい にほんこくない はたら もとりゅうがくせい し ひ べんきょう あい ま
現在、日本国内で働いている元留学生は私費であったので、勉強の合間にアルバイトをしな
がら、何回も奨学金に応募していました。なかなか当たらなかったのですがあきらめずに応募
をつづ たび すいせんぶん か あ すいせんぶん した じ しゅう
を続け、その度にわたしは推薦文を書きました。当たらなかった推薦文を下敷きにしながら修
せい くわ じょうで き すいせんぶん すいせんぶん こう そう
正を加えたので、わたしにしてはかなり上出来の推薦文ができました。推薦文が功を奏したの
かれ とう じ こくないさいこうがく しゅうがくきん かれ せいせき
か、彼は当時国内最高額の奨学金をゲットしました。もちろん彼の成績などがよかったことは
言うまでもありません。これで味を占めたのか、かれ いま にほんこくない はたら
何はともあれ、元留学生たちに幸あれと祈るばかりです。

「アジア人財資金構想」

高度専門留 学生育成事業

経済産業省・文部科学省「アジア人財資金構想 高度専門留 学生育成事業」により採択された「大学院自然科学研究科前期課程 高度専門（技術・ビジネス）留学生特別コース」の日本語・日本文化教育部門に積極的に参画しています！

2007年6月29日、経済産業省より「平成19年度「アジア人財資金構想」に係る企画提案の公募結果について」(<http://www.meti.go.jp/press/20070629011/20070629011.html>)が発表されました。金沢大学は、同構想のうち「高度専門留 学生育成事業」に「北陸地区産学官連携リソースを活用した理工薬系留 学生の育成」というプログラム名で応募し、その独自性が高く評価され採択されました。

このプログラムは、大学院自然科学研究科博士前期課程に「高度専門（技術・ビジネス）留学生特別コース」という特別枠を設けて実施されます。教育カリキュラムの骨格として、①専門知識とスキルの修得、②日本の伝統文化と慣習の理解、高い日本語能力と日本企業ビジネス文化理解、③技術者経営教育に関する知識習得、インターンシップを通して高度実践能力育成、

の3点が組まれています。

留学生センターはカリキュラムの第2番目(表中の「日本語・日本ビジネス教育」、ピンク色左列部分)の日本語・日本文化教育を担当します。具体的には、

(1) 総合日本語コースの上級(E及びF)レベルにこの特別

コース専用クラスを開講し、

(2) コース生が「いしかわ金沢学」を受講できるようにもします。また、「日本企業ビジネス文化理解」教育では、(財)石

金沢大学における教育		産学連携による教育	
専門教育	日本語・日本ビジネス教育	企業実践教育	
専門個別科目(10単位以上選択修得)	(必修を含む18単位以上選択修得)	(6単位必修)	
機械・メカトロ系 (機能機械科学専攻、人間・機械科学専攻)	総合日本語 (2科目4単位必修)	ビジネス基礎論 (1科目2単位必修)	地域企業概論 (1科目2単位)
IT・電子系(電子情報工学専攻)	ビジネス日本語 (2科目4単位必修)	MOT(技術経営)教育 (2科目4単位必修)	企業の特徴と優位性ある技術の理解
創薬・分析系(生命薬学専攻)	外部委託	技術マネジメント基礎論 ニュービジネス創造論	地域企業研究 (1科目2単位)
課題研究(8単位必修) 修士論文の作成	日本文化(金沢学) (1科目2単位)	企業ビジネス研修 (1科目2単位必修)	インターンシップ事前教育
		インターンシップ	企業技術研修 (1科目2単位)
			インターンシップ

専門個別科目詳細		
機械・メカトロ系 (機能機械科学専攻、人間・機械科学専攻)	IT・電子系(電子情報工学専攻)	創薬・分析系(生命薬学専攻)
機能機械工学(必修)、システム制御特論、ロボットセンシング、ロボットメカニズム、機構設計特論、ロボティクス、知的制御工学特論、構造最適設計、システム設計工学、ロボット運動学	電子計算機特論、適応システム理論、データマイニング論、分散並列ソフトウェア設計論、並列計算理論、アルゴリズム特論、多次元情報処理学、映像情報処理学、信号理論、ミクスティングナルLSI工学、多次元信号システム	創薬論、応用構造解析学、生物系研究者へのキャリアパス(1科目2単位以上)細胞膜輸送学、細胞機能と生体防御、低分子生体成分分析学、環境衛生学、臨床薬物代謝学、薬効・毒性発現機構学、遺伝情報発現学、薬品合成化学、医薬品製造化学、創薬資源学、天然物薬学、活性相関分子科学

川県国際交流協会石川県日本語・日本文化研修センターに業務を委託して、夏と春の休業期間中2回にわけて「ビジネス日本語集中レッスン」(計210時間)を実施します。

今までとは異なる新たな留 学生教育の分野ですが、大学院修了後に即戦力として日本企業や日系企業に就職できる留 学生を送り出せるよう、大学院自然科学研究科と協力しながら努力していきたいと考えています。ぜひ、皆さんも応援してください。

(アジア人財資金構想企画委員・専門プログラム開発リーダー 太田 亨)

平成19年度「アジア人財資金構想」高度専門留 学生育成事業に採択

<http://www.kanazawa-u.ac.jp/university/administration/prstrategy/eacanthus/0706/29b.html>

(金沢大学 Web 広報誌 e-Acanthus, 2007/6/29)

相談指導部門

留学生と危機管理－地震－

留学生の皆さんが生活する日本では、出身国で体験することのなかった出来事にぶつかる事が多くあります。地震もその一つです。

2000年になってから、日本は大きな地震を三回も経験しました。2004年10月の中越地震、2007年3月の能登沖地震また7月の中越沖地震がそれです。三回の地震とも金沢大学に地理的に近い所で起こったため、留学生の中には不安や恐怖、そして今後を心配する姿が見られました。海外の親たちからの安否の問い合わせもあったと聞いています。また一方で、ボランティアとして積極的に被災地に行った留学生もいたでしょう。

これらの地震の際、留学生には大した混乱や被害もないと聞き、ホッとしました。(1995年に神戸で起こった阪神淡路大震災の時には、留学生の犠牲者も出ました)日本は地震の多い国ですから、予め対策を立てておく事が大切です。ここでは、地震が起きたとき、どのようにして「自分を守るか」についての要点だけを簡単に書きます。

- ① 慌てない(激しい揺れは1～2分、その後少し間をおいて余震が続く)
- ② 頭を保護する(テーブルの下に入るなどして、落下物を避ける)
- ③ ガス器具/電気などを止め、コンセントを抜く(火災防止)
- ④ 出口を確保する(地震でドアや窓が開かなくなることがある)
- ⑤ ラジオなどで正確な情報を得る

(なお詳細は「金沢生活ガイドブック2007」の93～96頁を必ず読んでください)

「備えあれば憂いなし」です。緊急時には冷静に対処してください。

医学部には日本語学習相談室があります

医学部の日本語教室の終了後、永坂玲子先生と川上あつ子先生が、留学生の質問に答える時間を設けています。「製品の取扱い説明書が読めない」「書類の書き方が分らない」「挨拶の仕方はこちらで良いのか」など、留学生の日常生活の中の疑問点を、気軽に問い合わせる事ができます。きっと問題解決のヒントが得られるでしょう。先生がたのいらっしゃる時間は下記の通りです。

- ・毎週水曜日(授業の無い時でも開設しています)
- ・時間 午後1時から3時まで
- ・場所 医学部の日本語教室と同じ部屋

文化体験学習 「いしかわ金沢学」 (Kanazawa Studies in Ishikawa)

○夏コース (Summer Course)

平成18年7月1日(土)から2日(日)にかけて、平成18年度「いしかわ金沢学」夏コースが開催され、初日は「九谷焼の工程見学と絵付け体験」「着物着付け体験及び礼法講義」を行いました。

金沢大学と金沢星稜大学の留学生及び日本人学生40人が参加し、九谷焼窯元の「九谷光仙窯」で九谷焼の工程を見学した後、紅殻の顔料を使ってコーヒーカップや湯飲みに絵付けを行いました。午後は金沢大学創立50周年記念館「角間の里」に場所を移動し、全員が浴衣を着、日本人の「礼」について講義を受けました。まさに「礼儀」の大切さを肌で感じた体験でした。「金沢市キゴ山ふれあいの里」で宿泊し交流を深めた後、次の日には同会場で「金澤と和菓子」の講義を受け、和菓子作りを体験しました。

参加者からは「今まで知らなかった金沢や日本の文化を知ることができた」「話す言葉は違って友達になれた」などの感想が聞かれました。



○秋コース (Autumn Course)

文化体験学習プログラム「いしかわ金沢学」秋コースが11月2日(木)に開催されました。

秋コースは県の「いしかわ教育ウィーク」の一環で行われ、金沢能楽美術館などを舞台に、留学生及び日本人学生と市民30人が伝統芸能や歴史を学び交流を深めました。

10月に開館したばかりの金沢能楽美術館では、宝生流能楽師の藪俊彦氏による「能を知ろう」の講義とワークショップを通して、参加者は能の動きやお面について学習しました。実際に足袋を履き、能面をつけたり能楽器に触れるとともに、その一方で日本独特の表現方法に戸惑いながらも、日本人の微妙な心情を表す「能楽」について学びました。



○冬コース (Winter Course)

「いしかわ^{かなざわがく}金沢学」冬コースが12月2日（土）から3日（日）の1泊2日の行程で開催されま^{ふゆ}した。参加者は一般市民も参加し、9カ国の留学生や日本人学生ら34名でした。

1日目は「金沢市湯涌創作の森」染織工房にて「藍染め」「草木染め」に挑戦し、2つの異^{こと}なる染色方法を学びました。まずバンダナを輪ゴムでとめたり麻のひもで結んだりして藍染め^{あいぞめ}を体験し、その後ショールを茜や刈安の液に浸して草木染めに挑戦しました。

2日目は加賀野菜を使った和菓子「はすね羹」「五郎島金時とりんごの茶巾絞り」を作り、それらを用いた茶道体験を行いました。

どの体験も講義と組み合わせた体験型学習プログラムになっており、参加者からは「金沢の^{かなざわ}文化を肌で体験することができた」「日本人学生だけでなく地域の方々と交流することもでき、^{ふん}文化を^{はだ}肌で^{たいけん}体験することができた」「日本人学生だけでなく地域の方々と交流することもでき、^{こっきょう}国境・^{せだい}世代を越えた有意義な活動だった」「外国の人と日本語で話し合い、お互いの国の問題^{もんだい}点と文化の違いが分かった」という声が聞かれました。



国際教育研究部門

「TOEFL-iBT Seminar2007」

金沢大学留学生センター国際教育交流部門では、学務課留学生係を始めとする関係部局とスクラムを組み、本学交流協定校への派遣留学を目指す学生たちを支援するためのさまざまな取り組みを行っています。2007年9月には、TOEFL 受験対策のための2週間のセミナーを開催しました。ここではこのセミナーについてご報告したいと思います。

TOEFL (Test of English as a Foreign Language) とは、英語を使用する外国の大学や研究機関へ留学を希望する学生が受験する英語力判定試験です。そして学生は、ほとんどの場合、この試験で留学希望大学が要求する水準以上の得点をマークすることが求められています。この試験の形式は、2006年6月、「話す力」や「読んだり聞いたりした後で話したり書いたりする力」を試すセクションを含むものへと変更されました。それ以来、日本で英語教育を受けてきた学生にとって、この試験で高得点を取るのには至難のわざとなっています。金沢大学生も、この試験にチャレンジするのに大変苦労しています。さらには、学生を指導する側に立つ筆者らにも、この試験の受験対策・指導法の研究と開発が急務としてのしかかっています。

そこで本部門では、9月10日月曜日から9月21日金曜日までの2週間の日程で、本学交流協定校のタフツ大学 (Tufts University、アメリカ合衆国マサチューセッツ州メドフォード市) よりサマースクール英語主任講師のデボラ・ブランドン先生をお招きし「TOEFL-iBT Seminar 2007」を企画、実施しました。その目的は、在学中に本学交流協定校への派遣留学を目指している学生に、TOEFL で目標スコアを達成するための方法を身につけてもらうことです。

このセミナーには11名の学生が参加したのですが、そのほとんどが来年度に英語を使用する交流協定校への派遣留学を希望している学生です。また、ブランドン先生のご専門は、TEFL (Teaching English as a Foreign Language、外国語としての英語教授法) で、夏期には過去20年間にわたりタフツ大学で TOEFL 受験対策をテーマとした授業を担当していらっしゃいます。

セミナーの内容は、大きく分けて二つです。一つは、9月12日と19日の水曜日を除く毎日の午前中と午後1コマずつの授業です。ここでは文字通り、ブランドン先生から、TOEFL スコア・アップのための‘tips’ (ブランドン先生直伝の秘訣) を学びました。もう一つは、2日間の水曜日に行った日本や金沢の歴史、伝統、文化などをテーマとし、それを英語で表現する訓練です。セミナー内にこのようなアクティビティを設けたのは、TOEFL に上記の内容を含む身の回りの題材について話したり書いたりする問題が出題されるからということだけではなく、派遣留学する金沢大学生にとって日本や金沢について再認識しそれを英語で表現できるようにすることは必要不可欠だからです。9月12日と19日の水曜日、学生は教室だけではなく「現場」(兼六園、金沢城、香林坊周辺、忍者寺) にて、各自が前もって調査した内容についてのプレ

ゼン^{おこな}を行^{せんせい}いながら、ブランドン先生^{ひょうげんほう}から表現法やプレゼンの仕方^{しかた}についてのアドバイス^うを受けました。

このように、最高^{さいこう}に熟練^{じゅくれん}した先生^{せんせい}のもとで、最高^{さいこう}にモチベーション^{モチベーション}の高い学生^{たか がくせい}たちが学んだセミナー^{まな}だったのですが、学生^{がくせい}たちは、大量^{たいりょう}の予習復習^{よしゅうふくしゅう}と課題^{かだい}、授業^{じゅぎょう}での発信型^{はっしんがた}のアクティビティ^{はい}を毎日^{まいにち}こなした^{き も}こと、そしてブランドン先生^{せんせい}のかなり^{かなり}のスピード^{スピード}の英語^{えいご}のシャワー^{シャワー}をひっきりなし^あに浴びた^あことによる^{による}ものか、1週目^{しゅうめ}が終わ^おるころには、かなり疲労^{ひろう}している様子^{ようす}でした。気持ち^{きもち}が高揚^{こうやう}して床^{とこ}についても眠^{ねむ}れない学生^{がくせい}や、英語^{えいご}で夢^{ゆめ}を見る^{みる}ようになった^いと言う^い学生^{がく}もいました。しかし2週目^{しゅうめ}からは、明らか^{あき}に学生^{がくせい}たちの様子^{ようす}が変^{かわ}ってきました。ブランドン先生^{せんせい}への信頼感^{しんらいかん}と、先生^{せんせい}の手^てを離^{はな}れても目標^{もくひょう}に向^むかって一人^{ひとり}で効果^{こうか}的な学習^{がくしゅう}を続^{つづ}けていく自信^{じしん}がついた^{がついた}からだと思^{おも}いますが、筆者^{ひんしゃ}の目^めには、学生^{がくせい}たちの姿^{すがた}がとて^うもり^うりしく映^{うつ}りました。

今回のセミナー^{こんかい}は大成功^{だいせいこう}だったと思^{おも}います。学生^{がくせい}を指導^{しどう}する立場^{たちば}の筆者^{ひんしゃ}にとっても、大変意^{たいへん}義^い深い^{ふか}ものとなりました。筆者^{ひんしゃ}が今回^{こんかい}のセミナー^{まな}で学^{まな}んだ内容^{ないよう}は、学内^{がくない}に還元^{かんげん}していくと同時^{どうじ}に、TOEFL 対策^{たいさく}をテーマ^{たんとう}とした担当授業^{たんとうじゅぎょう}（『英語Ⅱ』など）に反映^{えいご}させていき^{はんえい}たいと思^{おも}っています。

セミナー最終日^{さいしゅうび}の9月21日^{がつ にち}、タフツ大学^{だいがく}より、筆者^{ひんしゃ}の元^{もと}に11個^このキーホルダー^{キーホルダー}と一通^{つう}の手紙^{てがみ}が届^{とど}きました。タフツ大学サマースクール^{だいがく}のディレクター^{ちから}であるジョディ・ハネルトさん^{ほこ}からでした。「TOEFL セミナー実現^{じつげん}のために、タフツ大学^{だいがく}がお力添^{ちから}えできた^ぞことを、たいへん誇^{ほこ}りに思^{おも}っています。これから、両学^{りやうがく}が互^{たが}いに協力^{きょうりよく}し合^あうことにより、ともに発展^{はってん}していくことができ^{おも}ますように」という内容^{ないよう}の手紙^{てがみ}でした。ハネルトさんのお言葉^{ことば}には、今回のセミナー^{こんかい}のもう一つ^{ひと}の意義^{いぎ}が含ま^{ふく}れています。つまり、このセミナー^{こうりゅうきょうていこう}によって、交流協定校^{こうりゅうきょうていこう}であるタフツ大学^{だいがく}と本学^{ほんがく}との教育交流^{きょういくこうりゅう}が実質^{じっしつ}的に拡大^{かくだい}したという点^{てん}です。

最後^{さいご}になりますが、現在^{げんざい}国際協力交流部門^{こくさいきょうりよくこうりゅうぶもん}では、タフツ大学サマースクール^{だいがく}との共同作業^{きょうどうさぎょう}として、TOEFL 受験指導法^{じゅけんしどうほう}の開発研究^{かいはつけんきゅう}をスタート^{スタート}しようとしています。このような取^と組^くみが、学生支援^{がくせいしえん}にとどまらず、本学^{ほんがく}と交流協定校^{こうりゅうきょうていこう}との絆^{きずな}を確実^{かくじつ}に強化^{きょうか}することに貢献^{こうけん}できるよう、今後^{こんご}ともベスト^{ベスト}をつく^{つく}っていき^{いき}たいと思^{おも}っています。

国際教育交流部門 齊木 麻利子



「プリンス^{いしかわ}トン in 石川(PⅡ)プログラム2007

金沢大学留学生センターは、6月20日に金沢大学文学部と部局間協定を結んでいるプリンス^{だいがくとう}トン大学等の学生と本学学生との交流会を実施しました。



参加したのは県が実施する「短期間石川^{いしかわけん}県で学ぶ日本留学プログラム」(PⅡ)で来県したプリンス^{らいけん}トンをはじめとするハーバード、イエール、ペンシルバニア、カンザス、ニューヨーク、ブラウン等の大学生45名でした。その学生1人と、金沢大学の学生1人がペアになり、附属図書館などの学内施設を案内して回りました。

その後、金沢大学創立50周年記念館「角間の里」で「金沢大学クイズ」により大いに盛り上がった学生達は、金沢市草笛愛好会の皆さんによる草笛演奏を聞いたり、実際に草笛にチャレンジして楽しみ、地域住民との交流も深めることができました。



日韓共同理工系学部留学生コース (通称：日韓プログラム)

「第8期生について」

第8期は第6期同様1名の受入れで、第4期以来の理学部数学科（来年度から「理工学域数物科学類」に再編）への配置です。

写真（中右）は2007年3月に韓国側の予備教育が始まってまもなく、予備教育実施機関である慶熙大学校国際教育院を訪問したときの写真です。8期生を迎えるために、一時帰国していた金沢大学の日韓プログラム第7期生が訪ねてきてくれました。

また、今回の訪問では同国際教育院からの要請により、第8期生97名全員に対して「日韓プログラム・日本での予備教育～金沢大学の例～」と題した特別講義を行いました。半年後に待ち受ける日本での予備教育を少しでも実感してくれたら嬉しく思います。



理工学域紹介のホームページ（日本語）



8期生（右側）と先輩のプログラム生（左側）

「金沢大学の学部学科再編に伴い、理学部と工学部が再編・統合されます！」

金沢大学は来年度平成20年度から現在の8学部が「3学域・16学類」に再編されます。それに伴い、日韓プログラムに参加する理学部と工学部は同じ「理工学域」の中に入り、さらにその中では6つの学類で構成されるようになります。来年度からは一つの学域として、金沢大学を目指す日韓プログラム生にとってより選択の幅が広がるとともに、進学したい学類が決めやすくなるものと確信しています。

理工学域及び同学域6学類についての詳しい情報は、学域紹介ホームページ（上左、URL：

http://www.kanazawa-u.ac.jp/collegeschool/20_se/index.html）を参照してください。

担当：太田 亨（日韓プログラム担当）

大学院予備教育（日本語研修コース）

このプログラムは、大学院に入る前の日本語初級集中コースです。ほとんどの留学生が日本語ゼロレベルから始めて、15週間で初級日本語を修了し、その2週間後には日本語で研究発表をして、コースを卒業します。皆、大変まじめに勉強して、最後の発表会のときは、おどろくほど立派な発表ができます。

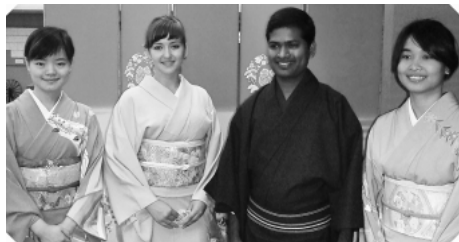
今年の記事は、第24期生の中から二人に書いてもらうようお願いしました。そして、わずか一日後には立派な原稿が私のところに送られてきました。インドのアチャリヤさんは、本当のゼロから始めて、コースの終わりには、自信をもって何でも日本語で話せるようになりました。でも、この記事はなぜか英語です。実はすでに専門の勉強を始めているので、とても忙しいそうです。ベトナムのトゥさんは、全部日本語で書いてきました。私の直したのは少しだけです。私たち教師は、このようなすばらしい学生たちに恵まれて、本当に幸せだと思います。

日本語研修コース担当 三浦香苗

Nihongo OK !

アチャリヤ サダナンダ（インド）

We were just in the first week of our intensive Japanese language course. Our sensei showed us a video film in which a former student of the same course presented a final project seminar in Japanese (language). We were surprised to see the language fluency that the student had. Furthermore, when the sensei told us that we would also have to give the same type of project presentation, we were all shocked. "Sensei, it is just impossible in just 4 months" we said. Our sensei said only one thing, "We shall see". Yes, finally we saw it. It's really unbelievable that in just 4 months of language course we were all trained so well that we could not only converse in Japanese confidently but conduct a small research and present it in Japanese.



This was probably possible only because of the well designed course with ample opportunities for practice of the language. Inclusion of several kinds of class room activities like VOTAK where we interact with Japanese and foreign students who speak Japanese ; outside activities like the "Ichinichi activity" in which we interviewed Japanese tourists in Kenrokuen garden ; excursions like "Shirakawago" and "Gokayama" provided us with opportunities to learn Japanese culture along with practicing the words and grammar that we learned in the classroom. More than all these, the events that really elevated our Japanese proficiency were presentations like "Watashi no kuni" and the final project in which we had to design, interview, analyze and then present in Japanese. As I mentioned, at the end of the course after the final presentation, we really could not believe ourselves that we could speak and present in Japanese fearlessly and confidently.



I feel that just the design of a course may not guarantee that we will succeed in it. But only a pool of dedicated teachers can make the course module workable. Our teacher Miura sensei has the best group of teachers (rather I would say, they are like our friends and parents because they never treated us like students, but like friends) who took more interest than us in teaching and making the classroom literally a playground. We never felt we were studying, but playing. We learnt the language while playing. Such was the kind of activities employed by teachers to make us understand the grammar. I strongly feel this kind of teaching made this course very successful.



Classroom environment is important in making us feel comfortable while we learn. I should really acknowledge here the kind of closeness and sense of belonging that students from various geographical locations and cultures had in this group. We were as one like a family, enjoying togetherness. Tours and outings have really filled our life with some memorable moments. We can never forget the sweet memories of this beautiful course. This course not only made us comfortable to live in Japan by teaching us the language but also gave us some sweet memories, friends and teachers whom we will remember for life time.

日本語研修コースの思い出

レ・ゴ・トゥ (ベトナム)

私はベトナムから来た、レゴトゥと申します。私は北陸先端科学技術大学院大学の研究生ですが、日本へ来る前に日本語が全然わからなかったので金沢大学で6ヶ月日本語を勉強しました。その間に先生たちからいろいろなことを教えていただきました。

クラスは正式には午前8時45分から12時まで、午後1時から4時15分までですが、私たちはいろいろな質問をしたので、先生たちはいつもおそく帰られました。

私は最初はクラスで日本語の発音が一番下手でしたが、先生たちが毎日頑張って直して下さったので、今は発音がとてもいいと思います。ほかにも、私たちは先生たちといっしょに外でいろいろな活動をしました。私たちは1日ゆうぜん会館に行って着物の作り方を紹介してもらって、そのあと兼六園で日本人にインタビューしたり、ほかの

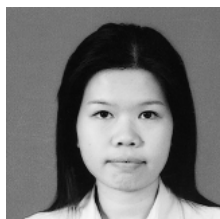
1日は白川郷に旅行したりしました。こうやって、私たちは日本語の勉強だけでなく日本の生活にもだんだん慣れていきました。さらに、「私の国」の発表で、私たちは自分の国の紹介の機会も与えられました。その活動をとおして日本語も練習しましたし、いろいろな国の文化も知るようになりました。それはとてもいい経験でした。その結果は最後の発表会で、私たちは自信をもって日本語でいろいろな調査結果を発表できました。

私は今先端大に入りましたが、金沢大学の先生たちから教えていただいたことを忘れられません。



金沢大学短期留学プログラム (KUSEP)

KUSEP 生としての一年間



Kamsoi, Orathai
タイ、チェンマイ大学

私は2006年10月から金沢大学の KUSEP というプログラムの留学生として金沢に来ました。日本学生支援機構の奨学金を得て、このプログラムに参加する機会をいただいたのはありがたいことだと思います。KUSEP に参加した学生は世界中の色々な国から来ていたので、国際交流ができて、いい経験になったと思います。

日本に留学したはじめごろは、色々なことを心配しました。タイで日本語を勉強したことがなかったから、日本語が全然話せませんでした。ですから、日本での日常生活はとても大変でした。でも、KUSEP の授業で日本語を勉強して、だんだん日本語ができるようになりました。先生も優しく、大変お世話になりました。先生は教えるだけでなく、休憩する間、いつも日本の観光地や料理や習慣など色々な話をしてくれ、とても面白かったです。

日本語のクラス以外、私の一番印象に残った授業は「日本文化体験」という授業です。その授業の名前の通り、ありのままの日本文化にふれ合う機会がありました。例えば、茶道や生け花、金箔などです。タイにいたとき、私は生け花の本をみたことがあって、とても感心しました。日本に留学できたら、いつか生け花をやってみたいなと思っていましたから、その授業のおかげで、私の夢が叶いました。自分で生け花の本を読むだけで分からないことも、体験してみればじめて分かると思います。色々なパターンがあるし、生け花で日本人の考えを表すことができるし、生け花は予想以外に複雑だと思いました。

私の専門は生物学なので研究室に通って研究に参加しました。日本語のクラスがおわったあとで毎日研究室に行きました。研究室では外国人もいますから英語と日本語と話すのがおもしろかったです。いつでも研究する時は問題がありましたが、先生は私におしえてくださいました。本当にどうもありがとうございました。

最初に私の心配した毎日は、いつからかはっきりわかりませんが、だんだん楽しい毎日に変わっていきました。クラスを楽しんで、日本の生活を楽しんで、自分を楽しんでいます。私の KUSEP の一年間はそろそろ終わりますが、私の心の中には、まだたくさんの思い出が残っています。

私にとって KUSEP の一年間はいいい経験になりました、日本の生活が楽しかった。金沢はきれいな町だし、天気がいいし、日本人も親切だし、この一年間を忘れないと思います。最後に私はみなさんに「どうもありがとうございました」と伝えたいと思います。



Gow, Esther

オーストラリア、オーストラリア国立大学

2006年10月に、私は留学生として金沢大学の KUSEP プログラムに参加するために初めて来日しました。13歳からずっと日本に興味があったので、KUSEP プログラムに参加できて、とても嬉しかったです。2007年7月までの10ヶ月間、日本語と日本文化の授業に出席しました。最初は日本語があまり良くできなかったのですが、日本語の授業を受けて頑張ったので、だんだん分かるようになりました。また、日本でできた友達のおかげで、少しずつ上手に話せるようになりました。友達や先生たちもとても優しく、大変お世話になりました。

日本語の授業以外に他の色々なクラスで勉強したい人は KUSEP の学生として金沢に来たらいいと思います。岡沢先生の「日本文化体験」という授業で色々な活動ができました。例を挙げると、生け花、金箔、茶道、大槌焼きなど体験できました。その上、ビットマン先生の授業で空手道と杖道を教えてもらいました。本当に楽しくて、すばらしい経験だったと思います。これらのクラスのおかげで日本文化について色々習うことができました。一回でもちゃんとやってみることが大切です。

日本の生活はオーストラリアの生活とはとても違います。例えば、最初日本の食べ物は好きではなかったですが最後は大好きになり、毎日、日本の食べ物だけを食べました。もちろん、日本にいて困ることもありました。先生や友達のおかげで、日本の文化や習慣が分かるようになり、日本人の考え方が分かるようになったと思います。

私は日本に来る時、大阪、東京、京都、仙台、横浜、金沢の中から、金沢を選択しました。私は田舎に生まれましたので、金沢のほうが自然が多く、静かな雰囲気がありそうに思えました。また、石川県は多くのスキー場があり、私はスノーボードが大好きなので金沢に行きたいと思いました。しかし、去年の冬は雪のために悪い年で、よい雪で滑るには北海道に行かなければならなかったぐらいです。春休暇や夏休暇に私はたくさん旅行をしました。北海道には行きませんでした。東京、大阪、京都、沖縄、広島と豊田に旅行ができました。

日本の一年間で、私にとって一番良かったのは色々な国から来た人に出会ったことです。留学生は中国、韓国、タイ、インド、ヨーロッパなどから来ました。色々な国から来た人と会話をしましたから、色々な国のことも理解できるようになりました。例えば歴史とか、文化とかを習いました。そして本当にいい友達になりました。一年間の留学はとても楽しくなりました。大学を卒業した後に世界を旅行するつもりです。他の国がオーストラリアの近くにないので世界中に友人を持っていることは実際に重要であると考えます。旅行が大好きですから、将来あらゆる留学生の友人に会いたいと思います。

私にとって KUSEP の一年間は本当にいい経験でした。この一年間の中にはいい思い出がいっぱいあり、これからも忘れないと思います。皆さん、お世話になりまして、どうもありがとうございます。じゃあーまたね。



日本語・日本文化研修プログラム

日研生の日本での1年間

10月に渡日し、翌年の9月まで日本で学ぶ日本語・日本文化研修生（以下において「日研生」と記す）にとり、日本での一年間はどのような経験でしょうか。毎年9月30日に最後の日研生を送り出した後、次の学年の新しい日研生を迎えますが、学生達の目線で日本を見ようと心のスイッチを「リセット」します。学生の上に、彩り始めた角間の山々や草の匂いなどはどのように移るのでしょうか。初秋の緩やかな季節の変化に学生達は日本的な美しさを感じるのでしょうか。始めて親元を離れて、異国の地で生活することに対して感じるはずの不安をどのように取り除いて上げればよいのかなどと心配しつつも、慌ただしく、オリエンテーション、履修ガイダンスなどを始めなければなりません。



加賀友禪体験

京都大学、大阪（外国）大学と合同で、3大学の2006年度の修了生を対象にした合同調査を行いました。更に、毎年行っている本学独自の修了アンケートも日研生のニーズ分析の貴重な資料となっています。金沢大学の日研生は事前情報として最も必要であると回答していたのは、プログラムの内容に関する情報や留学生寮などの生活に関する情報です。これらに関しては渡日前に十分に情報入手ができたと概ね満足しているようですが、最近の傾向として、正規学生の授

業やクラブ活動、日本人学生との交流などの付加価値的な部分に関しても事前に情報を求めていることがアンケート調査で分かります。

開講式やプレースメントテストなどの行事が終わり、授業が始まると、最前列に座り、目をきらきらさせながら、授業に臨みます。プログラムの＜背伸び教育＞の方針として、全学習をナチュラルスピードの日本語で行うことにしており、ついてくることを学生に求めています。中級前半の日本語のクラスにプレースされた学生もあり、そのような学生にとって90分の日本文化の講義の聴講はどの程度の負担なのか、心配しながらも見守ります。最初の頃は、ひっきりなしに電子辞書を引いていた学生や全ての講義を録音して、何度も聞いていた学生も2,3ヶ月も経てば、講義が大抵理解できるだけの聴解、語彙力を身に付けてきます。めきめきと能力を伸ばしてくる学生を目の当たりにすると、毎年ながら、教育の無限の可能性に感動せずにはいられません。

一年間の留学期間は非常に短いので、最大限に学習効果を発揮するためには、渡日段階でのレディナス（学習に入る準備）が大変重要です。留学先として金沢大学を選んだ理由として、全学習を普通の日本語で行っているからと回答している学生が多いです。更に、合同調査では、金沢大学の半分の日研生は修了研究テーマが渡日前に決まっていたと回答していました。レディネスの度合いが高ければ高いほど、一年間の順調な滑り出しが可能になります。

10月の半ばあたりに対面式を行い、各学生に里親家族を紹介しします。日本の家庭生活を直接体験しながら、日本人のものの見方・考え方などに触れる機会を作るためです。里親交流プログラムについては渡日前から知らせていますので、学生も大変楽しみにしているようです。交流の理想は飾り一つない、国籍

を超越した人間と人間の交流であり、またその交流を通してお互いに高め合うことであると思います。協力してくれる地域の方も長年継続的に参加してくれている方ばかりですが、どれだけ学生の期待に応えられているか、そして里親の期待に応えられているのかということを考えて、まだまだ改善しなければならない点が多いと思います。しかし、地域との交流のきっかけとして最も役に立ったのは里親プログラムであると日研生はアンケートで回答しており、一方、里親も継続的参加を通して多くのことを得たと回答しています。

最初のスタートが無事切れたと喜ぶ間もなく、5月病ならぬ、11月病がやってきます。突然に食欲を失い、ホームシックにかかる学生が毎年数名います。心を開いて誰かに相談することが出来るだけの十分な時間が経過していませんので、細心の注意が必要となります。幸いこのホームシックは軽いものであることが多く、話を聞いてあげれば、大抵の場合は直ぐ元気になります。

4月に行う2泊3日の合宿がプログラムの



合宿中の昼食

重要な一環となっています。各学生に対して1学期目の成績報告をしながらフィードバックを行い、中間発表会を行うことで、次の学期の修了研究の一通りの筋道ができます。学習の面で上述のことが重要ですが、この合宿中に学生同士が強い結束力で結ばれ、日研生としての仲間意識を深めます。そのことがプログラム運用上大変有意義なことです。

グループ学習の教育効果が最大限に発揮される条件とはいかなるものか大変興味深いです。様々な状況的要素が関与してくると思わ

れますが、学生数で考えると、12名から15名が最も教育効果を発揮する人数ではないかと思っています。上記の人数ですと、学生同士がお互いに良き見本になりながら、教育効果を高めていきます。もう一つの条件が仲間意識の共有、すなわち一種のメンバー・アイデンティティの形成です。この条件の実現のために合宿という形態が非常に役に立っています。修了研究にも力を注がなければならない2



のうがくたいけん
能楽体験

学期目はあっという間に過ぎ去っていきます。日本文化体験実習科目及び課外活動として1年の間に20数種類もの文化体験をしながら、学生達は「日本」を様々な角度から学びます。これらの文化体験が日研生の記憶に深く刻まれるようで、日本理解を深めるのに最も役に立ったと殆どの学生が回答していました。日本に対する総合的な理解を深める上で、それに次いで役に立ったものとして挙げられていたのは日本文化のその他の授業でした。

修了式も滞りなく終わり、涙を流しながら帰っていく日研生との別れは送り出す方にとっても心が引き裂かれる悲しい出来事です。しかし、幸いなことに日本の大学院に進学する学生や日本で就職する学生が年々増えており、再会の日もそう遠くなくなっています。帰国後にリバーサルカルチャーショックで、日本に戻りたいという意識から病気になる学生も時々います。しかし、それも一時的なもので、学生達が力強くそれぞれの次なる道歩み始めます。

日本語・日本文化研修プログラム担当
パリハワダナ ルチラ

総合日本語コース

留学生の皆さん、総合日本語コースで日本語を学びませんか？

毎回ニュースレターで、授業の様子や学生の作文などを紹介しています。でも、まだまだ総合日本語コースのことを知らない留学生も多いのではないかと思います。

そこで、今回は、総合日本語コースのA,B,C1の3コースを紹介することにしました。

授業をする先生からの紹介と、それを実際に受けた学生からの推薦のメッセージです。今、日本語を受けていない留学生の皆さん、ぜひ私たちと一緒に、日本語を勉強してみませんか？

★ Aクラスの先生から

This class is aimed at those beginning their Japanese studies, or those who are capable of basic greetings or rudimentary conversation. We start from the beginning, with pronunciation and hiragana, so no Japanese ability whatsoever is required.

We're sure that in the course of living in Japan you've experienced problems because you could not understand Japanese ; that you've wanted to make friends, and express yourself but just couldn't. But with just a little study, your comprehension will improve and the horizon of your capabilities will expand. You'll master simple daily conversation, and you'll gradually be able to read. You'll make friends with students from around the world. Studying something outside your major will make for a breath of fresh air. Most importantly, being able to understand Japanese will give you a great sense of satisfaction.

Each course meets 5 times a week, Monday-Friday for 90 minutes, over half a year (one semester). Although students take other classes and participate in extracurricular activities, those who faithfully attend class and complete their homework will find that after one semester they can communicate in basic conversational Japanese. It's important to build a strong foundation, so don't skip class-do your best during the first semester!

★ Aクラスの留学生から

Hello students :

I would like to tell you about my experience in the A-class Japanese Language course last Spring Semester 2007.

It is obvious that to learn any language the most important things are gaining speaking capability and having a clear idea of basic grammar. Speaking any language while making numerous mistakes will never be quite accepted by na-



tive speakers. Facing this problem, I made up my mind to attend A-class, and was not disappointed : after completing the course, I am now confident enough to communicate in essential daily conversation with fewer mistakes than was the case before taking this class. Another important thing is that the daily 90 minutes of class is a good language drill. For students who attend A—class I would like to recommend that you attend all classes and do your homework properly after each class. I believe the best way to learn a new language is to enjoy the process of learning, and I hope the friendly atmosphere created by the senseis in the class will lead you in this process.

ダスタギル・ムハマド・レハン (バングラディシュ)

し ぜん か がくけんきゅう か
自然科学研究科

★ B クラスの先生から

B class is a continuation of Elementary Japanese (A Class) and continues with Japanese fundamentals.

Those who successfully complete this class will find living in Japan increasingly rewarding. You will be able to communicate with native Japanese students and teachers, as well as society at large. Traveling alone is no problem, and you should be able to pass the Japanese Language Proficiency Exam Level 3 . Upon completion of the course you will have the opportunity to study in Intermediate or Advanced courses.

Therefore, although we realize that students are busy pursuing research in their own fields, we strongly encourage you focus on your B Class studies (although those who have failed in the past have successfully retaken the class). B Class includes speaking practice, as well as an interview—based research project/presentation, and of course the opportunity to meet students from around the world.

For those who wish to master Japanese, focus on successful completion of B Class!

★ B クラスの学生から

わたし デンケンケン きょねん がつ ちゅうごく いま かなざわ
私は田娟娟です。去年10月に中国からきました。今、金沢
だいがく けんきゅうしつ べんきょう
大学のロボティクス研究室で勉強しています。

にほん く まえ にほん ご ぜんぜんべんきょう き
日本へ来る前、日本語は全然勉強しなかった。来てから、
A クラスでひらがなとカタカナから日本語の勉強を始めまし
た。もう一年になりました。早いですね。

いま じゅぎょう お にちじょうき かい わ にほん ご かんたん
今、B クラスの授業を終えました。日常的な会話を日本語で簡単にできるようになりました。
とてもうれしかった。B クラスでいろいろな言葉^{ことば}を勉強^{べんきょう}しました。生活^{せいかつ}によく使^{つか}っている文法^{ぶんぽう}
や文型^{ぶんけい}もいっぱいあって、役^{やく}に立ちました。A クラスより、B クラスはコミュニケーションの
時間^{じかん}が増^ふえました。四人^{よにん}の先生^{せんせい}も優^{やさ}しいし、それにいつも心^{こころ}をこめて講義^{こうぎ}を準備^{じゅんび}していました。



だから、ほとんどの講義はみんなのにぎやかな談笑で過ごしました。とても楽しかった。

留学生の皆さん、一緒に日本語を勉強しましょう。

デンケンケン ちゅうごく
田娟娟 (中国)

しぜん か がくけんきゅう か
自然科学研究科

★ C1クラスの先生から

このクラスは日本語の初級レベル、「みんなの日本語」だったら、IとIIが終わった人が入る初中級クラスです。初級のレベルは終わったけれど、まだ日本語が上手に話せない、話すチャンスがなかなかない、という人は多いと思います。このクラスではそういう人をターゲットにして、勉強した文法を復習しながら、「読む、聞く、話す、書く」の力をのばして中級レベルへ進めるようにします。クラスでは、日本や留学生の国の社会や文化を理解するために、いろいろなトピックの読み物を読んでみんなで話します。また、勉強した文法やことばが使えるように、会話の練習もします。クラスに日本人を呼んでするインタビュー活動は留学生に人気があります。四技能 (four skills) の活動で特に「話す」活動をたくさん入れて、「わかる」日本語を「できる」日本語にするのがこのクラスの目的です。

★ C1クラスの学生から

留学生の皆さんへ

日本での研究やいろいろな活動にがんばっている留学生の皆さん。皆さんは本当によくがんばっていると思います。2007年の春学期に私は総合日本語コースのC1クラスを受けました。そこで、今日は皆さんに次の三つのことを伝えたいと思います。

一つ目は、日本語の授業を取っている留学生は、みんな真面目に日本語の学習をし、むずかしくても諦めないでください。

二つ目は、都合が悪くて、日本語のクラスを取る事が出来なかった人たちも、ここ日本にいる間にぜひ日本語を学ぶ機会を持ってください。

三つ目は、これから日本に留学する人たちも、必ず日本語のクラスを取ってください。

私たちが世界に地球村を作るためには異なる言語の習得と理解が必要ですから。

一緒に勉強しましょう！



ムクワヤ ゴディフレイ (ウガンダ)

きょういくがく ぶ
教育学部

大学・社会生活論

「留学と国際交流」を担当しました

昨年度から始まった新一年生対象の授業、「大学・社会生活論」の中の「留学と国際交流」を、今年も留学生センターの教員が担当しました。留学や国際交流への興味を高め、学生に一歩踏み出してもらおうというのが趣旨です。今年は昨年と違い、留学生センターの全専任教員が持ち回りで担当し、それぞれの専門や経験を生かすことにしました。以下に、コーディネーターの感想と、留学生センター教員からの金沢大学学生のみなさんへのメッセージを載せます。

1) パリハワダナ ルチラ (「留学と国際交流」コーディネーター)

大学・社会生活論科目の本年度の留学生センターのコーディネーターを務めさせて頂きました。本年度の新たな試みとして、異文化交流を取り入れ、留学生センターの教員にそれぞれの多彩な海外経験、留学生教育経験などについて話して頂きました。ご協力頂きました留学生センターの皆さん、派遣留学説明を担当して下さいました留学生係の皆さん、本当にありがとうございます。何よりも派遣留学体験談を担当して下さいました学生の皆さんの熱心な姿勢に感服しました。3回も打ち合わせに来て、後輩に何を、どう伝えるべきか真剣に考えてくれた態度には教師の私たちも見習うべきことがたくさんあったと思います。この科目を通して1年生の皆さんに国際社会に関心を持ち、多角的な視野を形成しながら、有意義な大学生活を送るための小さなきっかけを提供できたらと思っています。

2) 北浦勝 (留学生センター長。工学部土木建設工学科、物質科学工学科担当)

「留学の勧め」CNN など外国のテレビを見ていても、日本のニュースはあまり出てこない。CNN はアメリカの放送局であるから欧米のニュースが多いが、それ以外では戦争やきな臭い事件、自然災害などが中心である。比較的平和な日本が出る幕がないのはよいことなのかもしれない。日本人の現れるニュースにはサイエンスなりスポーツがある。CNN を見ることは、ある意味で、外国から世界と日本を見る機会である。しかしもっとよいのは留学して自分の体験として世界と日本を見ることである。

3) 岡沢孝雄 (医学部保健学科担当)

大学の中には海外に研究のフィールドを持っている先生、海外の大学・研究機関と共同研究をしている先生がたくさんいます。先生が外国で調査や研究をするという話を聞いたとき、先生と一緒に連れて行ってもらえないか聞いてみてください。もし一緒に行くことができましたら、現地の共同研究者や協力者と交流をしながら実際の研究にも触れることができます。このような経験は将来の自分の進路決定に大きな影響を与える要素にもなります。皆さんの積極的な行動を願っています。

4) 太田亨 (理学部担当)

国際感覚を身につけるには、まず自身が他国に住み「外国人」と呼ばれる経験をしてみましょう。しかし、外国に馴染むのはすんなりいくわけではありません。始めは相手文化を拒絶してしまうこと(カルチャーショック)が多いですが、そのうち少しずつ楽しいと感じるようになります。自分なりにその国での生活に慣れてきます。そして、自国に帰って感じる何とも言えない違和感が逆カルチャーショックと呼ばれるものです。こういう経験を持つ人こそこれからの日本の社会に必要なのではないのでしょうか。ぜひ、皆さんも本学の海外留学制度を活用して海外生活に挑戦してみてください。

5) 長野ゆり (教育学部担当)

私が留学して得たこと：色々な国の人と接した(「違い」を認めることの大切さを知った。「国」ではなく「生身の人間」を知った)／自分が外国人である(→自分の人間性や能力の真の実力が問われる)という経験をした／日本を外から見ることができた／コミュニケーションの手段としての言語の重要性を認識した。

日本人学生の皆さんも、一度「留学生」になってみてはどうですか？

6) 峯正志 (経済学部担当)

日本に住む外国人が増えている。気がついたら我が家にも一人、家族として住みついている。このような状況は今後増えることはあっても減ることはないだろう。文化の違う彼らといかにしてうまく生活していくか。その鍵はコミュニケーション力にあると思う。相手の意思を正しく受け取り、自分の意志を正しく伝える。どちらも大事だが、日本人は「沈黙は金」とする文化があるので、まずは自己主張の訓練から始めてはどうだろうか。

7) ビットマン ハイコ (法学部担当)

自分を異国の地に置くと、自然にその土地やそこに住んでいる人々のことだけではなく、自分の国のことも見えてきます。自分自身のことでもだんだん見えてきます。若い時に異文化に接してみよう！留学はそのための最高の手段だと思います。

8) 三浦香苗 (工学部機能機械工学科、人間・機械工学科担当)

私の主な教育分野は外国人に対する日本語教育です。30年間続けてきました。そこから得たものは何かというと、他の価値観との真摯な交わりは自分を成長させるということ。授業でも言いましたが、外国人留学生(=他の価値観をもつ人々)と深く関わることをおすすめします。自分が「外国人」になって苦労する(=留学する)のもいいですよ。自分で考え、自分で立ち、人を思いやることのできる、教養ある国際人になってください。

9) 八重澤(松下)美知子 (共通教育担当)

私たちの大学がある、金沢で暮らす外国人市民のうち、およそ3割が留学生。これは日本全体の平均の約5倍あり、金沢には多くの留学生がいることが分ります。国籍別では中国・韓国が多く、来日直後は、雰囲気留学生と分りますが、1年も経つと日本の学生に間違えられる程、日本社会をよく学習します。

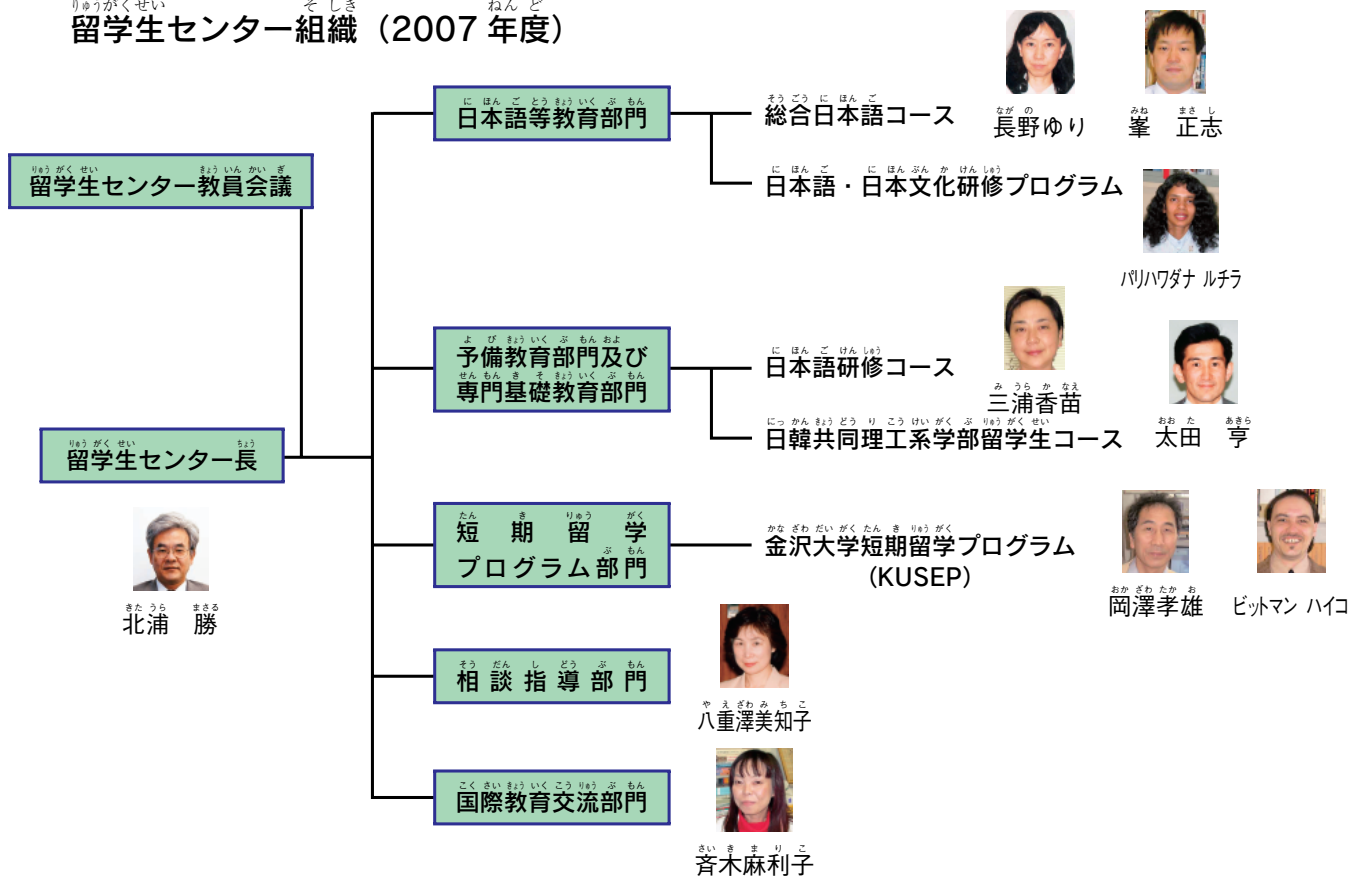
留学生の日本社会・文化体験談は、聞く度にハラハラ・ドキドキ、そして時には泣かされてしましますが、留学という「限られた時間」の中で、一生懸命自分を生き、目標を達成する姿に教えられることが多くあります。

さあ次は、日本人学生の皆さんが「留学」にチャレンジしませんか！

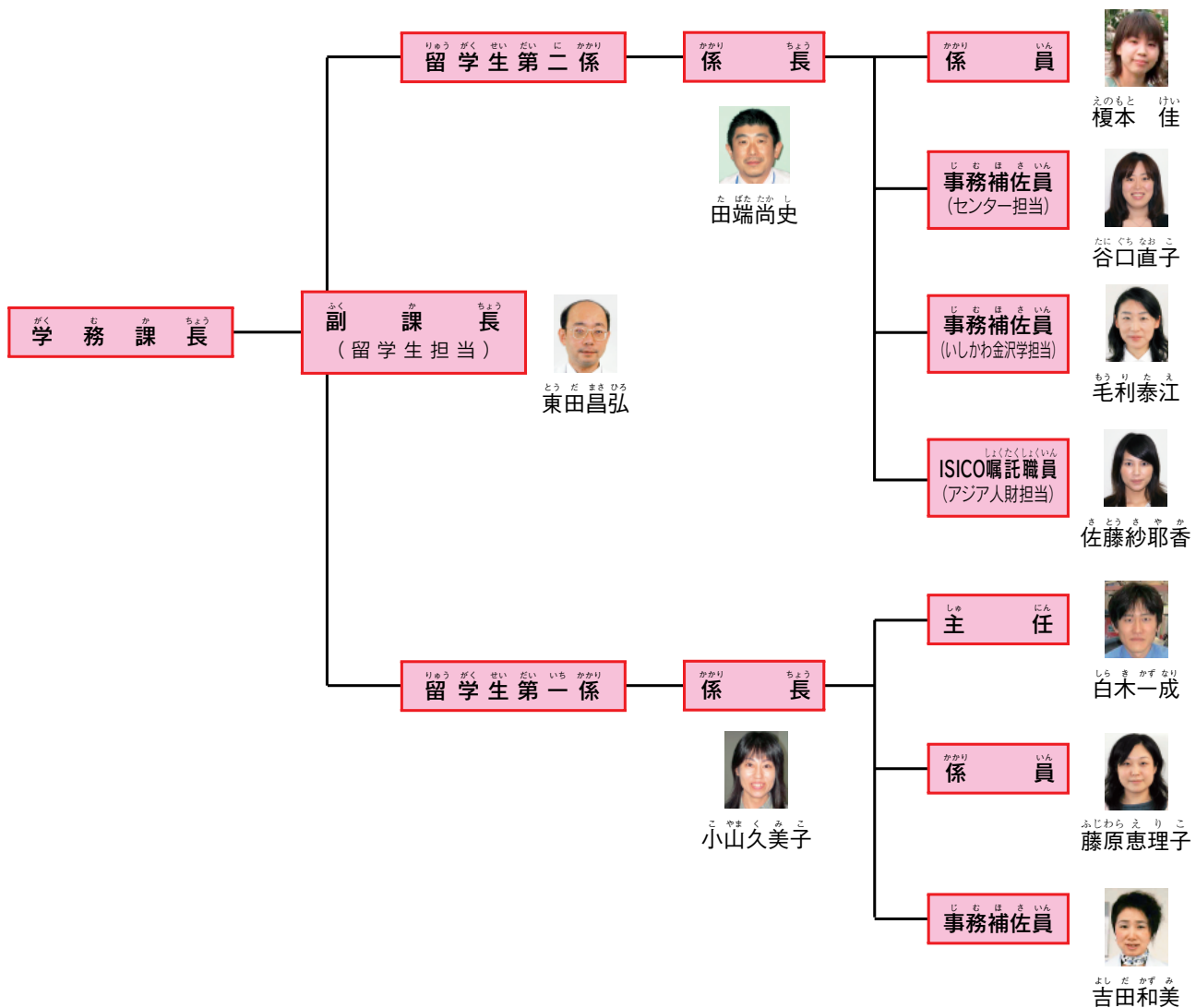
10) 齊木麻利子 (工学部土木建設工学科、物質科学工学科担当)

大学で教えている私にとって、異文化との遭遇は日常の出来事。自分とは言葉が違う、国や出身地が違う、年齢が違う、立場が違うなど、いろいろなバックグラウンドを持つ人と出会い、あまりに多様な価値観に触れて驚くことばかり。でも気づいたことが一つある！この人たち、見えたり聞こえたりする「外側」は自分とは違っても、結構「内側」は自分と同じだということ。そこで思う。相手と自分の共通の部分に目を向けてみたら？そうすれば、異文化と接触したときに、自分とは違うところも受け入れられるようになる。国や言葉を通り越して相手と分かり合うための鍵、国際理解に繋がる鍵はそこにあるのではないかしら。そして留学や留学生との交流は、この鍵を若いうちに手に入れて、その効力を試すための絶好の機会になると思います。

留学生センター組織 (2007 年度)



学務課留学生係組織 (2007年度)



留学生センターのホームページに韓国語版が加わりました！

2006年8月23日に新しくなった留学生センターのホームページですが、2007年には韓国語版が開設されました。今後は中国語版も作る予定です。ほかの留学生にもぜひ教えてあげてください。

日本語版 URL

<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp>

英語版 URL

<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp/eg/kuisc.html>

韓国語版 URL

<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp/kr/index.html>

金沢大学留学生センター
가나자와 대학교 유학생센터

Japanese English Chinese Korean

- 센터개요
- 일본어연수코스
- 일본어/일본문화 연수 프로그램
- 종합일본어코스
- 가나자와대학 단기유학 프로그램
- 말한공동 어공계학부 유학생코스
- 상담/지도부문
- 국제교육교류부문
- 시간표
- 일정표
- 간행물
- 링크집
- 사이트 맵

시간표 時間割 >> 일정표 学年歴 >> 간행물 刊行物 >>

新着情報 What's New 신학 정보

2007.9.25 2007년도 가을학기의 시간표와 학년력을 차례차례 공개해 갈 것입니다!

2007.9.24 하드웨어 장애에 의해 장기간 Web 서버에 불편이 생겼습니다.불편을 끼쳐드렸습니다.사과 말씀드립니다.

Google WWW 을검색 isc.ge.kanazawa-u.ac.jp 을검색

가나자와대학교 유학생센터 920-1192 이시와와리 가나자와시 카코마시가 Tel : 076-264-5188 E-mail : kuisc@sqit.ge.kanazawa-u.ac.jp

金沢大学留学生センターニュース 第11号

2007年10月31日発行

発行 金沢大学留学生センター
〒920-1192 金沢市角間町
TEL (076) 264-5188
FAX (076) 234-4043
ryuiku@ad.kanazawa-u.ac.jp

この冊子は、植林・森林認証取得木材使用など環境ISO取得工場にて作られた用紙を使用しています。